

「チンカイ城の仏像と釈迦院遺跡—モンゴル帝国時代の遺跡の現地調査から—」

1996年より開始された「ビチェース・プロジェクト」は、日本・モンゴル両国の歴史学・考古学の研究者たちがモンゴル国現地において共同で調査を進め、多くの研究成果をあげてきた。主な研究対象は、「ビチェース」の名の通り、文字が書かれたもの、碑文や銘文などであるが、それと並行して遺跡の調査も行なってきた。遺跡に関する最大の成果は、モンゴル帝国時代の重要な軍事拠点、チンカイ城をモンゴル西部のゴビアルタイ県シャルガ郡のハルザン・シレグ遺跡に比定し、継続的に調査・研究を行なってきたことであろう。

今回は、まず、これまでのチンカイ城調査の経緯と研究成果、特に2016年の発掘によって発見されたモンゴル帝国時代の仏像の意義について紹介したい。また、プロジェクトでは、近年、フブスグル県デルゲル・ムレン河岸に位置し、「釈迦院碑記」が出土したことで知られる釈迦院遺跡も調査対象としている。釈迦院は、チンギス・カン一族と姻族関係にあったオイラト部族が、その根拠地に建設したものである。注目すべき遺跡ではあるが、学術調査を踏まえた本格的な研究成果は報告されていない。調査はまだ端緒にすぎたばかりであるが、その現状を報告したい。